

わたしの旅 - 俵山温泉

一杉 秀樹

俵山温泉を知る人は少ないと思う。山陽本線の小月駅からバスで 1 時間ほど北に上がった中国山地に位置する湯治場である。長い間気になっていたところなので、山陽、瀬戸内の旅の終わりに訪れてみた（山陽、瀬戸内については稿を改める）。

小月は大分市に繰り入れられているがその昔は山陽道の宿場であって駅から少しのところの十字路に石碑が残されている。どことなく昔の雰囲気が残っている街を抜けると田畑が広がり農家が点在する。西日本を旅すると瓦屋根の家が多く残り風情を添えてくれるが、このあたりではその多くが石州瓦である。だんだんと畑が林に替わりその中をくねって走る。途中「天皇様」という不思議なバス停を通る。そして温泉街のバス停に着く。

露路のような石畳のメインストリートの両側に昔風の宿屋が軒を連ね、周りにも旅館が広がっている。風情に溢れる空間である。が、よく見るとその多くが廃業となっていた。由緒とは別にこのところは落ち目である温泉地であった。しかし時は秋、周りの山は植林がされておらず、一面広葉樹に蔽われなんとも美しい静寂である。

寂れた宿屋に挟まれて一軒、小さな食事処があった。宿の夕食のまえに立ち寄ると若者が 1 人で切り盛りしていた。地元出身とのことで、昔の賑わいやあたりの暮らしぶりを話してくれた。土地の人との会話は旅に色合いと深みを与えてくれる。

翌日、秋を満喫すべく散策を兼ねて近くの本屋に向かった。道は新しさが目に付く舗装道路であり、車は滅多に通らない。ここが保守の牙城長門の国であるという現実を改めて思われる。少ない車のおかげで色づいた山とせせらぎの景色のなかに存分身を浸せた。

歩くこと 30 分で「口バの本」に着いた。街道沿いにポツンと建ち、犬と猫と女主人がいる。コーヒーを飲み、主人が趣味で集めたらしい本のなかから、どんぐりについての文庫本を 1 冊求めた。宿までの帰り道はなぜか 15 分であった。

3 日目、バスにて小月経由一気に下関まで抜けた。